舞台監督研究室

発行　舞台監督研究室　2022 年9 月 21 日　第4号

三ヶ月ぶりの会合

前回の会合が6月9日でしたので、およそ3ヶ月半ぶりの会合となりました。

この3ヶ月の間に業界は大きく変わりました。まず、セクハラ、パワハラについてです。

先日はある現場で仕込み中に照明さんが大道具さんに泣かされる出来事がありました。この業界はセクハラ、パワハラが横行しています。まずオンラインで講習を受けてから稽古を始める必要があります。

それ、舞監が旗振るもんですかね？

と、業界のセクハラ、パワハラに対する問題提議と舞台監督の関わりに関する意見から会合はスタートしました。

いつもの通りですが、話の流れからいろいろな議題がもちあがり、それについて各々意見をしていくという流れで会合は進みます。今後、我々舞台監督研究室としてテーマとしていくべき議題の素案も上がってきたと思いますので、簡単ですが各項まとめたいと思います。

・劇場機構、新設について　キャパ、予算ありきで作るから、袖がないなどの問題が起きる。舞台監督等、専門家の意見を反映できるようにならないと、公演を打つ身としては厳しいものがある劇場が多々。

・舞台美術のSDGsの話　テレビ業界同じく、ユニット（例えば建具、壁、障子）等の組み合わせで美術を作っていこうという動きがイギリス、ナショナル・シアターであるそうで、日本でも取り入れていけないかという話が出ている。

同じ美術家でないと、なかなか難しい点はあるが、やっている美術家はいる。

・小道具の共有について　Amazonですぐに何でも揃うようになり、高津、藤浪使う機会が減った。公演で作った小道具も廃棄になることが多く、みんなで共有できるシステム？みたいなのがあるとよい。場所と管理の問題が絡んでくる。貸しても返す時に蓄光がついていたりと、礼儀がなってないことも多く、システム含め検討していく価値あるか。

・各セクションごとの個別化が進んでいるように思う。稽古に来なかったり、来てもワイヤレスのスタンバイなど、稽古を見ていない。稽古はビデオで見るようになっている。オンライン化の弊害もあるかもしれないが、もっとスタッフミーティングを増やしたり、生のコミュニケーションを増やす必要性が演劇にはあるんじゃないか。舞台技術者連合のような組織がやはり必要なんじゃなかろうか。新人研修を各セクション同時にやるのも一つのアイデア。袖のSSやスタンドは舞監が仕込む。

その他には、コロナ対策でホテル隔離が人権侵害並なんじゃないか、鹿の刺し身はうまい、大道具さんで仕切れる人材が少ない、誰かのせいで今の現場大変だ、という話が上がった。

個人的には新人研修を各セクション合同でやるのは面白い企画だと思った。全セクションが一緒に照明の吊り込みをして、大道具を建てる。SPを仕込む。その後、サウンドチェックやシュート、明かり作りを他セクションが経験するのはその後の現場環境を円滑にしてくれるように思う。

演劇は「生」であるがゆえ、コロナ禍でも制約が大きい表現の一つだ。だからこそ、現場の生の声、コミュニケーションを大切にして創作していきたい。（次回へつづく）

情報コーナー

☆伊那　産直市場グリーンファームでヤギが買えます。

☆ログハウス　200万で請け負います。

『舞台監督読本』税込み 1,100 円
全国書店、Amazon にて発売中
当舞台監督研究室でも取り扱っております

—編集後記—
第4 号の座談会の際に寄せられたコメントをみかみさんのかわら版を拝借して掲載しました。
皆さんのご意見、情報などお寄せください。（お）
butaikantokukenkyuusitu@gmail.com　　Twitter： @butaikantokuke1